

# 1歩先行く経営のヒントは現場にある 「ものづくり」へ向かう廃棄物処理の最前線 リサイクル・ループの構築で広がる新たな可能性

◆サニタリーセンター代表取締役 木村文男氏 高橋環境法務事務所所長 高橋利行氏

## 半歩先行く経営のヒントは現場にある

「廃棄物回収の現場に行けば10年先が見えます。世の中に必要とされていることを知るには現場に出ていくのが一番ですよ。会社で机に向かっていたらいいアイデアは出てきません」

埼玉県北部本庄市にある廃棄物処理業者サニタリーセンターの木村文雄社長は、60歳を過ぎたいまでも現場に出ていくという。食品廃棄物から堆肥をつくる新たなチャレンジに乗り出したのも、現場の空気を読んだことだ。

サニタリーセンターは、昭和45年に一般廃棄物の収集運搬業者として創業して以来、次々と業務内容を拡大してきた。廃棄物処理法の改正により、「時流に乗った新商売」として読売新聞に取り上げられた。「電話すればすぐに回収」をキャッチフレーズに、サニタリーセンターは最先端の会社として注目を集め、各地から同業者が視察に訪れるようになったという。

現在、サニタリーセンターは、一般廃棄物の収集運搬、中間処理（鉄・アルミ缶の圧縮、発砲スチロールの溶融、ペットボトルの圧縮・梱包）、産業廃棄



物の収集運搬、中間処理（粉碎、圧縮、圧縮梱包、溶融減容）及び特別管理産業廃棄物（感染性産業廃棄物）の収集運搬を行っているが、これは県北随一の規模だ。広い敷地内は廃棄物処理施設とは思えないほど整然としている。埼玉県南部の小学校からわざわざ見学に来るものうなずける。

## 廃棄物処理の法的知識と施設の設計をトータルサポート

「廃棄物処理業の法的サポートを手がけて10年、これまでたくさんの廃棄物処理業界の方々と会ってきましたが、成長している会社の社長さんの多くは現場好きのようです。現場にはビジネスのヒントがあるからでしょう」

そう語るのは、廃棄物処理業に特化した行政書士のサービスを提供している高橋利行氏だ。高橋氏はもともと埼玉県の環境部に所属していたこともあり、廃棄物の山に登って行って、不法投棄の取り締まりに関わったこともあ

るといふ。当時、廃棄物処理業者が逮捕される事件があり、それをきっかけに廃棄物処理業者の法律面でのサポートを目指すようになった。

廃棄物処理にはさまざまな手続きや許可が必要なため、法律の知識がないと思われ落とし穴に落ちることがある。その一方で、役所の指示の通りにやっても現場の仕事がうまくまわっていきとは限らない。そこで高橋氏は法律だけでなく、土地や機器の選定、効率的に業務を行えるような施設内の機器の配置まで、廃棄物処理業をトータルにサポートしている。

## 循環型の仕組みづくりへ向かう廃棄物処理業

サニタリーセンターでは、食品廃棄物を再資源化するプラントが6月24日に落成式を迎えたばかりだ。

このプラントの処理能力は日量14トン。回収された食品廃棄物は自動的に容器と中身に分別され、3層構造の発酵槽（クリーンコンボ65型）で堆肥化される。

「廃棄物処理業の経営というのは最先端を行っているからうまくいくというものではありません。10年前に食品リサイクルに着手しても、うまくいかな

かったでしょう。景気動向や法律や世の中の流れと会社の成長、そしていろいろな人との出会いに恵まれたこと、これらが全部そろって、食品リサイクルという新しい事業に乗り出すタイミングとなりました」

食品廃棄物の再資源化は、木村氏と高橋氏がタッグを組んで進めてきた事業とあっていい。これからの廃棄物処理業はリサイクルから、さらにその先の「ものづくり」に向かおうとしているというのは、二人に共通した見方だ。サニタリーセンターが創業した昭和40年代、廃棄物処理の主流が最終処分だったことを考えると、時代は大きく動いていることがわかる。

しかし、廃棄物処理からものづくりへのシフトはそう簡単な道ではないかもしれない。

「農家の方に受け入れてもらえるような堆肥づくりは、機械を買ったからと



食品と容器を自動的に分別するバック分離機

いってすぐにはできることではありません。埼玉県内の農業高校や大学など、学の力を借りなければ成功はありえないでしょう。

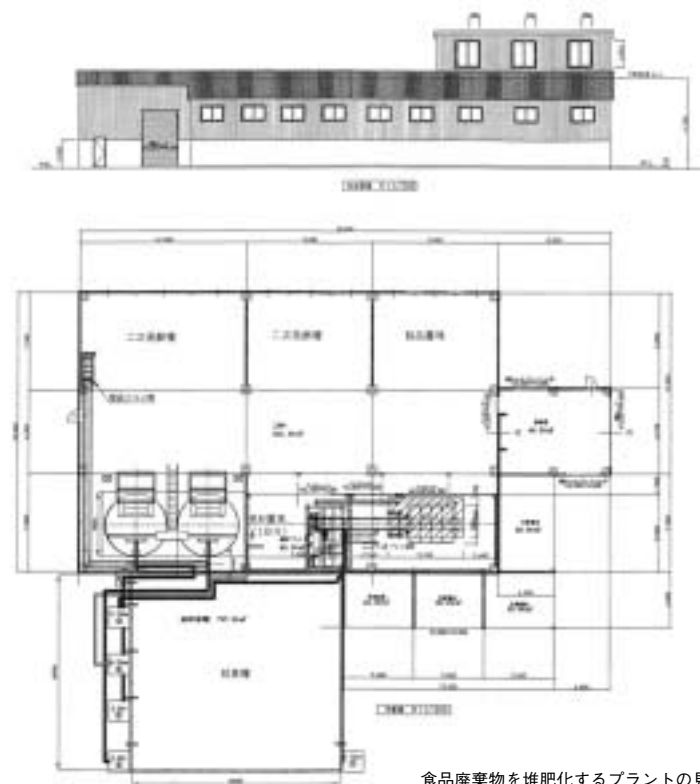
そうした専門家の助言を受けながら、まずは近隣の農家の方に畑を借りて、そこに子どもが集めてきた食品廃棄物からつくった堆肥をまいて実験的に野菜をつくり、それがうまくいったら今度は地元の農家の方々に無料で堆肥を使っていただこうと思います。

そして、その堆肥を使用して栽培した野菜を地元の特産品として販売していきたい。販売する場所などについては、これから本庄市と交渉を始めるところです。販売の件費までサニタリーセンターで負担して、地元の人に新鮮でおいしい有機野菜を提供していくことを目標としています。

まだまだ雲をつかむような話ですが、一つひとつ形にしていきたいと思っています」

木村氏の胸中では、未来へ広がる夢と希望、そして新たなステップに踏み出す緊張感が交錯しているようだ。

廃棄物処理業は、「ごみ」を扱うビジネスから再資源化ビジネスに、さらには循環型社会のインフラをつくるビジネスに変わろうとしている。



食品廃棄物を堆肥化するプラントの見取り図



3層構造の発酵槽（クリーンコンボ65型）